

## Complete thoracoscopic S9 or S10 segmentectomy through a pulmonary ligament approach

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉川, 拓磨 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10470/31328">http://hdl.handle.net/10470/31328</a>

## 主論文の要約

Complete thoracoscopic S9 or S10 segmentectomy through a pulmonary ligament approach 肺靱帯アプローチによる完全鏡視下 S9/S10 区域切除術

東京女子医科大学外科学（第一）教室

（主任：大貫恭正教授）<sup>Ⓔ</sup>

吉川 拓磨

The Journal of Thoracic and Cardiovascular Surgery, In Press

### 【目的】

肺靱帯とは、胸膜と胸膜が合わさった組織で、区域間隔壁を形成し肺実質内に入り込んでおり、手術の際、容易に肺実質を分けることができる。葉間からの剥離を必要としない全く新しいアプローチ法である S<sup>9</sup> 及び S<sup>10</sup> の区域切除術を行った。

### 【対象および方法】

2009.3～2013.9 までに胸部 CT で S<sup>9</sup> もしくは S<sup>10</sup> に位置する 2 cm 以下の結節影を認め、胸腔鏡下に S<sup>9</sup> 及び S<sup>10</sup> 区域切除術を施行した 23 例を対象とし、年齢、診断、術式、手術時間、出血量、ドレーン留置期間を検討した。

### 【結果】

対象 23 例の年齢は平均 62 歳。転移性肺腫瘍 13 例、早期小型肺癌 8 例、良性腫瘍 2 例であった。全例完全胸腔鏡下手術で施行した。術式は、S<sup>9</sup> 区域切除が 6 例、S<sup>10</sup> 区域切除が 8 例、S<sup>9</sup>+S<sup>10</sup> 区域切除は 9 例であった。平均手術時間は 188.3 分。平均出血量は 66.3 g。ドレーン留置期間は平均 3.7 日であった。

## 【考 察】

区域切除術は、肺葉切除術に比べ技術的に難しいが、特に S<sup>9</sup> や S<sup>10</sup> の区域切除は難易度が高いとされている。それは、S<sup>9</sup> や S<sup>10</sup> の気管支、肺動静脈は、葉間面から肺実質奥深く分枝しているためである。葉間面より剥離を進める従来法では、S<sup>9</sup> や S<sup>10</sup> の肺動静脈、気管支の分枝までの距離が長く、本来切る必要のない S<sup>6</sup> と S<sup>8</sup> の間に切り込まなくてはならない。我々は、肺靭帯からつながる区域間隔壁が、下葉の区域間を分けるという解剖学的特徴と、容易に分け入ることができることから、肺靭帯は S<sup>9</sup> や S<sup>10</sup> の区域切除術の際、有用であることに注目した。また、肺靭帯から S<sup>9</sup> や S<sup>10</sup> の気管支、肺動静脈の分枝までの距離は短く、剥離してもほとんど出血せず、視野確保も容易であった。CT 画像を 3D 画像に再構築するソフトを用いることにより、ターゲットとなる結節、肺血管、気管支の位置関係が容易に示され、胸腔鏡において、より正確に末梢の血管や区域気管支を処理することが可能となった。そのため本法による完全鏡視下の S<sup>9</sup> 及び S<sup>10</sup> 区域切除が可能であった。しかし、本法は従来の方法と比べ、リンパ節郭清が不十分となる可能性があり、適応は十分に検討する必要がある。

## 【結 論】

葉間からの剥離を必要としない新しいアプローチ法で、完全鏡視下 S<sup>9</sup> 及び S<sup>10</sup> の区域切除術を行い満足する結果を得た。